

の移動を避けることが望まれる。

遺伝的な単一化：

ある特定の樹から採取した種子や穂木から増殖した苗は、遺伝的に同じ性質を持っている可能性がある。そのような苗をある土地に大量に植栽した場合には、遺伝的な単一化を帰たす可能性が大きい。病原菌の蔓延により、一度に消滅の危険もある。

自然状態で淘汰される種苗の生存：

人為的に播種して育てた場合、自然状態では淘汰される種苗が生かされる。移植によりそのような種苗から育った成熟個体の野生群落への影響も否定できない。

以上のように野生の集団の中に植物を移植を行う場合には、遺伝子の攪乱を起こす可能性が大きい。兎に角、緑にするために、どこで集めたかはっきりしないが、ドングリであれば何でもよい、という考えで植林を行うことや野生の植物群落の中へ異端者の導入を避けてほしい。以上のように、ある群落に種子を撒いたり、育てた苗木を植林することには、賛成し難い。それぞれの土地に長年生き続けている木々（個体）を大切にしたいものである。

最近話題になっているセナミスミレについて
—セナミスミレの移植による自生地の増殖の可否—

上記のことから、セナミスミレは自生地で絶滅した訳ではないので、移植という手段でなくて、自生地での増殖を図ることが妥当と考える。自生地の遺伝的な特性を温存させておく意義と大切さを認識してほしいと思う。

移植する苗が、自生地の種子から育成した場合でも、遺伝的な特性が単一であったり、また、種子を採取した親の遺伝的な特性にも問題点も残るので、自生地近くの移植は避けられた方が無難であろう。野生植物の遺伝子攪乱には、特段の配慮が望まれる。

セナミスミレについては、10年前にも本誌に取り上げ、生育地の保存を願っているが、当時から様相が大きく変わっているのは、残念である。

瀬波海岸のセナミスミレを訪ねて 新潟県植物保護 第14号：2-3. (1993)

ユキワリソウ(スハマソウ)の自然集団への移植について

ユキワリソウの乱獲による自然集団の減少を危惧して、山中に栽培した苗を植え込み、かつての野生の状況を復元しようという試みがなされて、新聞などで報道されている例も多い。また、ユキワリソウの生えていない里山に植栽してユキワリソウを保護しようという行為もしばしば話題として報道されたりしている。もともと自生していない山中に安易にユキワリソウに限らず、他の植物を移植することは避けてほしいものである。いずれの行為も自然を大切に「ユキワリソウを保護しよう」という善意のあらわれであるが、種の多様性保全の観点からみると、望ましい行為ではなく、野生集団の遺伝子の攪乱を進めていることになる。つまり、もともとユキワリソウが生えていた集団に、栽培した種苗を導入すると交雑が行われ、新たな遺伝子が加わることになる。野生種の遺伝子保全に逆行する行為になり、折角の善意が遺伝子攪乱につながるようになる。

参考：岩淵公一氏 新潟日報 私の視点「生態系乱す人工交配苗植栽」(2004年4月24日掲載)

私の視点



岩淵 公一(66) 新潟市(国際雪割草協会副会長)

生態系乱す人工交配苗植栽

新潟の早春を飾る野生の雪割草(オオミズシロ)の配苗が使われることが大問題です。その結果、植栽地の雪割草の子孫は野生種本来の個性、遺伝子ではなく、雪割草だけを増殖し、野生群落保全のための植栽と、見せるための公園的植栽を混同してはいけないのです。も一つは長岡市「園管すなわち、「野生群落保全、復活目的の植栽では現地の野生種増殖品以外持ち込んでほならない」公園目的の植栽は、周囲数m以内の自生地がない場所なら人工交配種を使ってもよいが、他の生態系への影響を考慮する」。この二点に意が行われている植栽活動なので、適切に行われることを切に望みます。

新

潟

日

報